

【ゼミナール創設から2ヶ月後に「S.H 君がいなかったらゼミナールを辞めていたよ」と言われるまでに成長!!】

こういわれた理由は私の責任感の強さが背景にあります。
大学3年生の4月から組織経済学を学ぶゼミナールに入りました。

私のゼミナールは昨年創設され、私の代が1期生であり、5人で活動しています。当初はその影響から、組織の方向性が定まっておらず、また一人ひとりのゼミ生が方向性を決めるための議論に積極的に参加できていない問題を抱えていました。そのことにより、議論が続かず設立から1か月間は、90分でゼミナール活動が終わってしまうという状態が続きしました。具体的な原因は、新設間もないことから、ひとつの発言がゼミの方向性に大きな影響を与えることを恐れ、誰も責任を取りたくない、という考えが蔓延していたことにあります。そんな状況を何とか解決したいと考え、常に私が初めに発言をして責任を取り、その後にゼミ生に質問をして意見を求めるように行動しました。

そのような行動を取ろうと思った理由は「俺が何とかしなくちゃ」という感情を強く抱いたためです。地道に取り組んだ結果、設立から2ヶ月後には、ゼミ生が積極的に発言するようになり、ゼミナール終了時間も設立当初に比べ、約60分延びるようになりました。また参加メンバーの1人からは「私、S.H 君がいなかったらゼミナール辞めてたよ」と言われました。この言葉をもらえた時はすごく嬉しかったのを今も覚えています。

そもそも「俺が何とかしなくちゃ」という感情を抱いたきっかけは幼少時代に遡ります。

物心ついたときから高校生3年生ごろまで、両親が毎日のように喧嘩をしていました。理由は、お金の問題や教育方針の食い違いです。その中でも特に、父と母がお互いの悪口を私に言うてくるのが最も辛かったです。ただ、私は家族のことが大好きでしたし、大切な家族との暮らしを良くして自分の居所を作りたい、という感情を強く抱いていたため「自分がなんとか仲を保たなきゃ」という気持ちで、行動を後押ししました。

このような家庭環境で育ったため、9歳年上の兄がいて、末っ子であり甘えん坊な性格ながらも、責任感を強く抱く性格が形成されたのだと思います。

社会に出てからは、幼少期から培われた”責任感”を持って物事に取り組み、

与えられる側から与える側になり「目の前の人の悩みを解決して、安心を与えられる」

社会人を目指していきたいと考えています。